

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部

リハビリテーション学科 理学療法学コース

助教 石井 智也

1. 教育の責任

理学療法士は、国家資格を有する医療専門職であり、人の生命・健康、そして生活の質（QOL）に直接的に関わる重要な存在である。理学療法士養成校に課せられた教育的責任とは、単に国家資格の取得を目指す教育にとどまらず、社会に貢献し得る信頼される専門職を育成するという、使命を果たすことである。

健康科学部のリハビリテーション学科の教員として、主に専門基礎科目、専門科目を担当している。過去2年間の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。主要な担当科目は、専門基礎科目である運動学Ⅱ、専門科目であるバイオメカニクス、理学療法研究法、理学療法演習Ⅳである。

2023 年度

科目名	時期		受講者
運動学Ⅱ	1年後期	必修	66名
基礎演習	1年前期	必修	14名
バイオメカニクス	2年後期	選択	34名
			名
			名

2024 年度

科目名	時期		受講者
運動学Ⅱ	1年後期	必修	75名
運動学Ⅱ	2年前期	必修	26名
基礎演習	1年前期	必修	13名
理学療法演習Ⅳ	4年通年	必修	56名
理学療法研究法	3年前期	必修	63名
バイオメカニクス	2年後期	選択	23名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 日本体育・スポーツ・健康学会 若手研究者委員会 委員
- 2) 日本基礎理学療法学会 専門会員 A
- 3) 東京メディカル・スポーツ専門学校 非常勤講師
- 4) 健康科学大学 国家試験対策委員会 委員
- 5) 健康科学大学 学生募集委員会 委員

1～3) 若手研究者委員会において、次世代の研究者育成支援やキャリア形成支援の活動に参画し、教育と研究の融合的な視点から指導力の向上、また学会活動を通じて基礎理学療法学に関する最新知見を習得し、講義や実習指導においてエビデンスに基づいた教育内容の構築に活用することが可能となる。また、非常勤講師として、本学以外での医療系科目を担当することで、本学以外の教育現場における学生の理解度や実践力に応じた柔軟な教育展開を実践できると考える。

4～5) 国家試験対策委員としては、学生の学力分析や出題傾向の把握、対策講義の企画・立案に関与し、学生個別の教育内容の到達度の確認と指導方法の改善に努めた。その結果、国家試験合格率の向上に寄与している。また、学生募集委員としては、学生主体による SNS 広報活動の立ち上げを企画・推進するとともに、高校訪問や入試広報活動を通じて、本学の教育理念やカリキュラムの魅力を発信した。これにより、適性ある学生の確保を図り、教育の質の向上と良好な学習環境の整備に貢献した。

2. 教育の理念・目的

本学の建学の精神・基本理念である「豊かな人間力」「専門的な知識・技術力」「開かれた共創力」を備えた人材の育成を基盤に、私は以下の2点を教育の理念・目的として掲げている。

1) 自ら学ぶ姿勢をもち、科学的根拠に基づいた医療を提供できる理学療法士の養成

理学療法士は、一人ひとり異なる生活様式やニーズを有する患者に対して、科学的根拠に基づいた適切な医療を提供する専門職である。その専門性の根幹には、「科学的思考」の形成が不可欠である。科学的思考とは、得られた知見を基に、論理的な道筋を立てて体系的に考察し、仮説的な結論を導くプロセスである。加えて、科学的思考における結論は絶対的なものではなく、常に再検討の余地を含むものであり、謙虚な姿勢と継続的な探究心が求められる。このような科学的思考の基盤を学生時代に築くことは、生涯にわたり学び続ける専門職としての姿勢を育む上で極めて重要である。自己の課題に気づき、主体的に問題解決に取り組む力は、現代医療において不可欠な能力である。

したがって、私は、受け身の姿勢ではなく、自ら問いを立て、省察を通じて成長し続ける人材の育成を教育の柱としている。学生が「なぜそうなるのか」「どうすればよりよくできるのか」といった視点を持ち、主体的に学び続ける力を身につけられるよう、日々の教育実践に取り組んでいる。

2) 学問の面白さと奥深さをわかりやすく伝える

理学療法に限らず、あらゆる専門職教育において、学問的基盤への理解は、単なる知識の習得にとどまらず、思考の深さと実践の質を高める土台となる。そのためには、学生が学問の「面白さ」や「奥深さ」を実感し、自ら学ぶ意欲を引き出されるような教育

が不可欠である。学問に対する知的興味や探究心は、学習の継続を支える内発的な動機づけとなり、表層的な暗記ではなく、本質的な理解と応用力の育成につながる。

私は、専門的な知識や理論を単に伝えるのではなく、それらが臨床現場でどのように活用され、人々の生活とどのように関わっているのかを具体的に示すことで、学びの意味づけを明確にしたいと考えている。また、知識を一方的に教えるのではなく、学生の問いや気づきを尊重し、双方向的な学びの場を構築することで、学問への興味と探究心を育むことを目指している。

さらに、一つの講義の中でも、理学療法の基礎となる解剖学・生理学・運動学などの知識を相互に関連付け、複数の視点から理解を深められるよう授業を構成している。こうした学問のつながりや奥深さに触れる体験は、臨床実践の背後にある本質的な構造を理解する力を養い、現場での判断の質を高める原動力となる。

このような教育を通じて、知識を表層的に取り扱うのではなく、自ら問いを立て、学問を通して思考を深めることに喜びを見出せる人材の育成を目指している。

3. 教育の方法

1) 問題解決型授業

学問の奥深さを伝え、学生が自ら問いを立てて考える力を育むために、問題解決型の授業を積極的に取り入れている。講義ではあらかじめ答えを教えるのではなく、臨床的あるいは理論的な「問い」を提示し、それに対して学生が考察・調査・議論を重ねながら解決を目指す構成としている。

たとえば、「なぜ、この患者は歩行障害が生じているのか」といった具体的な状況を示し、そこから解剖学・生理学・運動学などの知識を関連づけて考察させている。この過程を通して、学生は知識を断片的にではなく、目的をもって結びつけ、活用する視点を身につけていくと考えている。また、授業中に行うグループディスカッションや発表では、多様な視点や考え方に触れる機会を設けており、他者との対話を通じた気づきや論理的思考の深化を促している。さらに、定期的な小テストやレポートの実施によって、知識の定着や思考のプロセスを可視化し、学生自身が学びの進捗を客観的に確認できる仕組みとしている。特にレポート作成において、現代の学生は文章で考えをまとめて表現することに苦手意識や抵抗を抱えている場合が多く、レポート作成を段階的に指導し、思考の言語化に慣れさせる支援を行っている。レポート作成は、事実をもとに論理的な筋道を立てて考察し、自らの見解を構築していくプロセスが求められる。これは、科学的根拠をもとに結論を導くという理学療法士に不可欠な科学的思考力や批判的思考力の育成に直結するものであり、学生が学んだ知識を自身のことばで表現する、内面化する大切な訓練の場となっている。

2) アクティブ・ラーニング

受け身ではなく、学生が能動的に授業へ関与する仕掛けを授業内に組み込むアクティブ・ラーニングを重視している。講義中には問いかけや小グループでのディスカッション、ペアワークなどを取り入れ、学生が自分の考えを言葉にし、他者と共有する機会を設けている。このような活動は、知識を自らの言葉で再構成しながら理解するプロセスを通じて、学習の定着と深まりを促すとともに、他者の視点に触れることで多角的な思考と柔軟な問題解決力の涵養にもつながる。このように、学生の主体的な参加と省察を促す授業展開により、「学び続ける力」や「問いを立てる姿勢」の育成を目指している。

また、授業内外を問わず、学生とのコミュニケーションを大切にし、質問や相談に応じる時間を積極的に確保するよう努めている。こうした日常的なやり取りを通じて、学生の理解状況や心理的なつまづきに早期に気づき、柔軟に指導を調整できることも教育効果を高める一因となっている。

3) 分野横断型の授業設計

理学療法の専門性は、解剖学や生理学といった基礎医学に加え、バイオメカニクスや心理学などといった多様な学問領域に基づいている。一つの視点だけでは捉えきれない複雑な対象である一人のヒトに対応するためには、各分野を統合的に理解することが不可欠である。そのため、授業では各科目の知識や理論を相互に関連づけて提示し、横断的に理解できるように構成を意識している。たとえば、バランス・姿勢制御を理解する講義では、筋・骨格系の力学的要因だけでなく、神経系の調節機構、心理的状态などの環境面の影響も含めて考察するよう促している。これにより、学生は個別の知識を単独で学ぶのではなく、多面的に結びつけながら総合的に理解する力を養うことができる。このような統合的な授業設計を通じて、学生が表面的な知識の習得にとどまらず、「点」ではなく「線」で物事を捉える力を培い、複雑な状況にも柔軟に対応できる思考力の育成を目指している。

これらの教育方法はすべて、学生が自ら問いを立て、科学的思考に基づき学びを深めながら、臨床実践に活かせる知識と判断力を育てることを目的としている。知識の詰め込みではなく、探究する姿勢と応用する力を育む教育を通じて、「思考する専門職」としての理学療法士の成長を支援している。

4. 教育の成果・評価

FD 委員会によって実施されている授業評価アンケートを活用して、授業内容の反省点を振り返り、改善に活かすことができる。また、実際の授業内容についても、項目毎に分析し、コメントの内容とともに、次年度のシラバスや授業内容に活かしている。

・運動学Ⅱ

1 年次後期に実施した運動学Ⅱでは、生理学的知識に重点を置いた講義構成とした。前期に履修済みの生理学と重なる内容も多く、授業後の感想には「復習として役立った」という肯定的な意見が見られた。一方で、生理学に対する苦手意識や理解困難さを訴える声も多く、授業評価アンケートでも「内容が難しい」「理解に時間がかかる」などといった回答があった。実際、定期試験の結果からも成績の二極化が明確に認められており、特に基礎学力や予備知識の差が学習成果に大きく影響していると考えられる。生理学は、医学の基盤を支える重要な学問であり、今後2年次以降に学ぶ評価学・臨床各論・治療学など、すべての専門科目に横断的に関わる土台である。したがって、1年次という早期の段階で生理学的な考え方に慣れておくことは、長期的視点に立った専門職育成において極めて重要であると考ええる。そのため、単なる知識の暗記ではなく、理論の背景や概念の理解を重視する授業方針をとっている。特に、各授業の冒頭には「この内容が将来の臨床現場でどのように役立つのか？」という学びの意義や実践とのつながりを学生に示すことを心がけている。

しかし、1年次の段階ではまだ、「なぜ学ぶのか」という意識が十分に育っておらず、学習の動機づけそのものが大きな課題となっている。この点については、今後も授業設計や教材の提示方法、学生とのコミュニケーションの取り方を含めて、試行錯誤を重ねていく必要があると考えている。今後は、以下のような改善を図る予定である。

- ✓ 難解な概念については図解やモデルを用いた視覚的説明の強化
- ✓ 小テストや確認問題の頻度増加により、理解度を段階的に可視化
- ✓ 学生が自分の学習過程を客観視できるよう、簡易レポートや振り返りの導入
- ✓ 学習支援として、授業外での個別フォローやグループ学習の促進

・理学療法演習Ⅳ

理学療法演習Ⅳは、4年生を対象とした卒業試験および国家試験に直結する重要な授業であり、学校全体の国家試験合格率にも大きく関わる科目である。そのため、本授業では「いかに学生が自ら勉強する環境を構築するか」を主軸とし、定期的な補講や分野別小テストの実施や、時期ごとの学習目標の明示を通じて、学生が計画的に学修できるよう授業構成を工夫している。

授業評価アンケートでは、「小テストや卒試対策として非常に役に立つ内容だった」といったポジティブな反応がある一方で、「個人差があるので自由に学習したい」「時期ごとの学習目標をより明確にしてほしい」といった改善を求める声も見受けられた。時期ごとの学習目標については、4月・夏期・秋期などの節目で Teams や口頭での説明を実施していたものの、学生には十分に伝わっていなかったことが分かった。今後は、Teams 等を用いた定期的な情報発信の強化に加えて、口頭での繰り返しの確認や、個別対応を通じた補足説明を重ねることで、情報の定着を図る必要があると考えている。

また、本授業は全体講義形式であるため、自由な学習スタイルを一律に取り入れることは難しいが、学生の学力差に応じた柔軟な対応も重要である。今後は、成績に応じた個別学習サポートの工夫を講義と並行して実施し、全体の底上げを図っていききたい。国家試験対策を単なる受験準備とせず、「知識を自ら深め、臨床判断力につなげるためのプロセス」として捉え直し、主体的な学習習慣を定着させるための教育的アプローチとして、授業改善を継続していききたい。今後は、以下のような改善を図る予定である。

- ✓ 個別の補講・フォローアップ指導の実施（特に理解の遅れている学生が対象）
- ✓ 質問・相談時間の定期的な設定（授業後や週 1 回など学生が相談しやすい時間枠の確保）
- ✓ 学習グループの形成促進（学生同士の相互学習を支援し、学習習慣の定着を図る）
- ✓ Teams 等を活用した学習目標やスケジュールの可視化と共有の徹底（学修の見通しを持たせる）
- ✓ 簡易な到達度チェックテストの導入（定期的な振り返りと自己評価の促進）

今後も、授業評価アンケートや学修成果のフィードバックを踏まえながら、学生の特性や学びのプロセスに応じた柔軟な授業改善を継続していく所存である。

5. 今後の目標

短期目標：自身で学習する意義を考え、主体的に考える力をもつ学生の育成

学生自身が「なぜ学ぶのか」という学習の意義を考え、理解し、自ら問いを立てて考える主体的な学習姿勢を育むことを目指す。そのために、授業では問いかけやディスカッション、小テスト、レポート作成などを通じて、思考の可視化と自己省察の機会を積極的に設ける。あわせて、学習目標の明示や Teams 等による情報共有を通じて、学生が見通しを持ち、計画的に学習に取り組めるよう支援を行う。

長期目標：科学的根拠に基づいた理学療法を実践でき、信頼される理学療法士の育成

科学的根拠に基づいた理学療法を実践できる思考し、社会に信頼される専門職としての理学療法士を育成することを長期的な目標とする。そのために、医学基礎を土台とした多面的な視点を統合的に学ばせる授業構成を継続的に深化させ、論理的・批判的思考力を育成する教育実践を推進していく。学生が生涯にわたり学び続け、自律的に成長し続けられるよう、教育内容と方法を絶えず見直しながら、一人の養成校教員として社会に貢献していききたい。